

# 演劇を続ける。

(聞き手・構成：松本和也＋後藤隆基)

## ◇第2回 集団とアトリエ◇

### 学生演劇ではない演劇をめざす

—— 関さんが主宰してきた三条会を中心に、  
集団としての劇団のありかたについて伺います。  
三条会は、千葉大学のサークルを母体として、  
1997年に結成されました。  
初期の三条会の、集団としてのありかたは、  
大学のサークルに似ているというか、  
ひとまずそれをスライドさせたような  
形だったのでしょうか。

**関** スライドはさせたんですが、  
もともと自分が所属していた大学のサークルを  
肯定的に捉えていたわけではなくて、要するに、  
「学生演劇じゃない演劇をやりたいよね」  
という人たちが集まったんです。  
当時は20代でしたから、  
たとえば、今の20代の演劇を僕が見るとして、  
「これと学生演劇と何が違うんだろう？」  
って思うものもあると思うんですが、  
中にはそうじゃないものもある。  
その差は何だろう？ ってことは  
旗上げのときにだいが考えましたね。

そのために三島由紀夫を選んだりして。  
だって、ふつう大学の演劇サークルで台本決定するとき、  
候補にあがらないですよ、三島さん。

—— 圧倒的な違和感です（笑）。

**関** そういうことではあったと思います。

—— 三条会の1作目が、三島由紀夫の『熱帯樹』でした。  
作品として違いを出していこうという方向性は、  
戯曲の選び方に表れていたと思いますが、  
集団の関係性についても  
旗上げに際しての方針などはあったんですか。

**関** 僕が一番年上で、みんな僕の後輩たち  
——おそらくは僕を慕ってくれてた  
後輩たちだと思うんですけど、  
自分も含めてまだ子供だったし、それを  
「どういう大人になろうか」みたいなところから  
考えて始めたんだと思います。

—— それは、作品づくりのうえで  
学生演劇との違いを出そうというところとも  
共通する考え方ですね。

**関** そうですね。

—— 当初は稽古場というところ……

**関** 大学の中でした。

—— 独立はしたけれど、  
空間的にはお世話になる形でやっていたと。

**関** そこにいたほうが、

逆に「学生とは違うことをやる」ということをやりやすかったんです。

目の前に「違う」対象があるわけですから。

## 千葉に三条会あり

—— 三条会を旗上げして、三島由紀夫を中心にさまざまな作品を上演していく中で、最初の転機は、舞台芸術財団演劇人会議主催の第2回利賀演出家コンクール（2001年）で『ひかりごけ』（武田泰淳作）を上演して、関さんが最優秀演出家賞を受賞したことかと思います。その前後で、劇団内の関係性や演出家に対する信頼などに、変化はありましたか。

**関** 僕より若い俳優の中には、もっと楽になると考えた人はいたかもしれないですね。でも僕は、賞をもらったからと言って、自動的にお金が入ってくるとか、そういうことにはならないと思ってました。それがきっかけで何かできることが生まれるかもしれないけど、お金を稼ぐにしろ何にしろ自分で何かしなきゃいけない。僕はそこで一切バイトはやめたんですが、ずっと貧乏なままですし、そんなに甘くはないと思ってましたけどね。

—— それでも、関さんの演出も含めて、三条会の作品に対する評価としては、劇団全体にはプラスの効果があったのではないのでしょうか。

**関** そうですね。ただ、そのへんは一概によかったとばかりは言えない部分もありますね。

若い時分にそういうことさえなければ、  
もっと早くに  
劇団を辞めてしまえた人がいるかもしれない。  
僕は続けるつもりでいたからいいんだけど、  
おかげでしばらく続けちゃった  
という人もいたかもしれませんから。

—— 大学のサークルから三条会を始めたときには、  
関さんも含めて、ある程度の期間を  
この劇団でやっていこうという考えだったんでしょうか。  
それとも、そんなに先のことは  
具体的には考えずにスタートしたんでしょうか。

**関** 具体的じゃなかったと思います。  
運が良かったのか悪かったのかわからないですけど、  
まったく戦略的なことはなかったです。

—— (笑)。

**関** ただ、誰もやってないようなことがやりたい  
という気持ちはあったので、  
とりあえず「千葉に三条会あり」という劇団を  
つくってみようというプランはありました。  
で、それが叶っちゃうのが、  
すごく早かったというだけです。

—— 早かったですか。

**関** まわりにいなかったもので、残念ながら (笑)。  
もうちょっと時間がかかっていたら、  
また違ったのかもしれないけど、  
実感として、叶ったのは相当早かったですね。

—— 自称だけではなく、周囲からも  
「千葉の三条会」という見方が

2001年の受賞前後に確立していきます。  
フェスティバルや海外公演も含めて、  
2000年代前半にさまざまな展開がありましたが、  
劇団内の関係は変わらず、  
そのときどきの演出スタイルで  
公演を重ねていくという感じでしたか。

**関** たとえば、劇団員から  
「また海外行きましょうよ」って言われたときに、  
「え、そう？」って僕が言うとするじゃないですか。  
「海外に行ったとなれば、親御さんにも……」  
みたいな言い方をされたこともあったんですが、  
そのことに僕自身は何の興味もなかった（笑）。  
演劇的に、どうしても海外で何かをやりたいという  
情熱が劇団員にあったら、  
それを叶えるために何かするかもしれないですけど、  
漠然と「海外に出たい、フェスティバルに出たい」  
という人に対して、  
何のために行くのかってことを  
ちゃんと話し合う機会ではあったと思います。

—— 海外公演は珍しかったとしても、  
フェスティバルばやりの時期でしたね。  
それ自体が、ある種の  
〈演劇が盛り上がってる幻想〉というか。

**関** そんなに売れてるわけではないにせよ、  
僕自身、引っ張りだこ感があったんですが、  
千葉に戻って自分の劇団の公演をやれば  
お客さんがちらほらちらほら……って状況なんです（笑）。  
そういう状況が嫌で、  
また海外に行ったりフェスティバルに出ると  
ちやほやされますから、出たがる人がいるんですが、  
現実を見て、目の前の「ちらほら」をどうにかしようよ、  
みたいなことを話し合いたい気持ちはありました。

—— 東京や海外でも活躍しながら、  
千葉を拠点にアトリエを構えようと思ったのは、  
いつ頃ですか。

**関** 僕が周囲のバックアップも受けながら、  
海外公演やフェスティバルに出ていたのが  
一通り終わったんです。  
なので、呼ばれるんじゃなくて、  
自分たちで何かをやりたかった。  
もともと僕は、  
千葉から東京に演劇を見に行っていたので、  
千葉に拠点を持つときに  
「東京の人を千葉に呼びたい、  
逆のルートを自分がつくりたい」  
という希望がありましたから、  
それを実現する方法を考える場がほしくて、  
アトリエをつくったんだと思います。

—— 稽古場としてだけではなく、  
人の流れや演劇界の関心の向き方を、  
関東一円から東京に行く、東京をめざす、  
といったものから転換させる仕掛け、  
そういうコンセプトがあったと。

**関** ありましたね、つくった当初は。

—— そのプランが実現するまでは短かったんですか。

**関** 短いですね。  
2005年にアトリエを持とうと思って、  
その年に持ちましたから。  
千葉は家賃が安いですし。

—— 劇団員の中で合意形成は

スムーズにいったんでしょうか。

**関** はい。  
東京だと結局、  
稽古場として使える場所があるんですよね。  
だけど、千葉では——僕らは大学で稽古してましたが——  
公民館もあるんですけど、  
そんなに演劇の稽古をやってる人もいないから、  
稽古場を借りるときに色々面倒なんです。  
前例があればいいんですけど、  
演劇の稽古が初めての場が多くて、  
飛び込みの営業に行くようなもの。  
たぶん劇団員はそれが嫌なので（笑）、  
持ちちゃったほうが楽だって気持ちがあったから、  
簡単に合意はとれたと思います。

—— それは千葉の演劇状況、  
演劇人口に裏打ちされたことですね。

**関** ええ。他にないですからね、稽古場。

## アトリエを構えた

—— その後、実際にアトリエを持って、  
作品づくりや集団内の人間関係など、  
初期段階でのよかった点、  
そうでなかった点を伺いたいんですが。

**関** アトリエに来ること、  
アトリエに来て創作活動をするのを、  
義務感でなくやりたかったんですが、  
どうしてもスケジュールに左右される感じでしか  
できなかった反省はありますね。  
それから、公演を目的にした稽古じゃないと、  
稽古ができないということもありました。

—— あれ、そうなんですか。

**関** 僕がアトリエに入ったら俳優が稽古してたとか、  
そういうことはなかったですね。

僕が率先して

「稽古やるぞ」って形でやってきたんですけど、

目的としては、僕が言うんじゃないくて、

それぞれが自分で考えて

稽古をする場をつくりたかったんですが、

そういう場はつくれなかったな。

—— 公演に向けて、大学や

どこかの場所を借りて稽古をするときは、

時間もお金も最小限に抑えなければいけない。

自前でアトリエを持つことの

大きなメリットのひとつは、

公演以外の稽古や体のトレーニングだと思うんですが、

アトリエを持つときに、話題にはならなかったんですか。

**関** 色々できるねって言って、色々やるんですよ。

やるんですけど、三日坊主とか、

僕が「その稽古どうなの？ 何の役に立つの？」

とか言うと、そこでやめちゃったりね。

そんなレベルではあったのかなという気はしますね。

—— アトリエを、アマチュアも含めて

他の劇団に貸すような話はあったんですか。

**関** ほぼなかったに近いですね。

でも、貸さないってことは決めてました。

さっきも言ったような、

スケジュールに束縛されないことをやりたかったので。

—— 「ここ埋まってるから」っていうと、それもできない。



**関** ほんとうにスケジュールに束縛されちゃう。  
いつでも行けばいいし、  
いつでも稽古したければすればいいし、  
っていうことだったと思うんですけどね。

—— アトリエを持ったことで、  
作品づくりや演出の方法、  
方向性は何か変わりましたか。

**関** ……ちょっと泣ける話になっちゃうけど、  
僕はほんとうにあの場所が好きで、  
愛していたと言っても過言ではないんです（笑）。  
自分が愛する場所——愛とかいうと難しいし、  
過保護にするわけでもないけど、  
そういう「いつでも気にしてる場」を持ったことで、  
自分の作品づくりも変わったんじゃないかな。  
もともと、人に対してだけは  
「あの人、いま元気かな」とか、  
そういうところは相当強い人間なんですけど、  
場所に対しても同じような思いを持つことになったのは  
大きいですね。

—— それが転じて俳優、劇団員への興味が増した、  
ということともまた違うんでしょうか。

**関** 劇団員はですね、同じ場所をもっと、  
劇団員の習慣とかが見えてきてしまって、  
僕としては常に、  
「君はいつも靴をそこ置くよね」とか  
「あなたはそこに座るよね」とか、  
そういうので飽きちゃうところがあつて。

—— 怒るとか迷惑というよりは、飽きちゃう。

関 飽きちゃいますねえ。

—— 大学で演劇に興味を持った人間が集まって  
劇団を始めたときに、  
関さんが考える劇団のイメージがあったと思うんですが、  
アトリエを持つことで、  
ひとつの到達点が見えたのかどうか、  
ということをお聞きしたいんですが。

関 口幅ったいですけど、最初は、  
僕のが好き、ということで集まったわけですよ。  
でも僕としては、  
僕のが好きで集まった集団というのはつまらないよね  
と思うので、その関係性を変えたかった。  
アトリエを持って、  
みんながアトリエという場を好きになって……  
というところから始めようと考えてたんです。  
さっき「俳優たちに飽きちゃって」と言いましたが、  
俳優が僕に飽きても問題ないですよ。  
「飽きちゃって」なんて言うと  
悪口みたいに聞こえちゃうけど、  
飽きるのは当たり前だし、  
好き嫌いの関係だけでやってると、  
それがすべてになって崩壊してしまうので、  
そうじゃないものをつくっていこうと思ってたんです。  
でも僕の実感としては、俳優たちは  
「関さんのことに興味がなくなった」ってなると、  
急にやる気をなくしちゃう。  
僕が興味をなくせば向こうも興味をなくしますから。  
そこで「いや、でもアトリエに行こうよ」  
とはならなかった感じがしますね。

—— アトリエを持つことで、集団としての関係性を、  
単純に人の好き嫌いといった興味から、  
場を共有して演劇をつくる関係に移したいと、

関さん自身はお考えになってたんですね。

**関** そうですね。  
アトリエを持つ前は、とくに何も考えてなかったので、  
この劇団は永遠に続くだろうとか  
勝手に思ってたんですが、アトリエを持ったら、  
つぶれるかもしれない、  
やめる人もいるかもしれない、  
劇団もなくなるかもしれない……  
そういうことを考えるようになりましたね。

—— 現実的になった、ということでしょうか。

**関** 僕は、ですけどね（笑）。  
たぶん僕以外の人たちは、  
そんなに現実的になってはいなかったと思いますけど。

## アトリエ公演について

—— 何度もアトリエ公演をされていますが、  
公演を打つという使い方は  
当初から決まっていたんでしょうか。

**関** アトリエ公演、東京公演、野外公演という  
3本柱は決めてました。  
目的が「東京から千葉に人を呼ぼう」  
ということだったので、  
アトリエで変わった稽古や公演をやって、  
野外はそれ自体が変わってるので、  
あとは東京で千葉の劇団が来たという広報活動をして、  
という形でしたね。

—— そのひとつのコンセプトだった  
「東京から千葉へ」というのは、  
実際いかがでしたか。

**関** 僕がやらなければゼロだったわけですから、  
それが何人かになった、  
という効果はあったのかな。  
でも、何回やっても  
「遠いね、遠いね」とか言われるのは  
嫌でしたね（笑）。

—— 横浜なら行くのに（笑）。

**関** そうですね。  
遠いのは僕のせいじゃないし、  
と思ってましたけど（笑）。

—— 東京公演や野外公演とは違って、  
アトリエ公演はキャパシティの問題もあるし、  
実験的なこともできたと思うんですけど、  
収穫としてはいかがでしたか。

**関** 好きなことをやれましたね。  
僕もきらわれるのは嫌なので  
——評価は気にしないとか言っときながら  
気にするんですけど、嫌なんです（笑）。  
東京公演とか野外公演で不特定多数の他者に見せると、  
色々と嫌な思いもするんですけど、  
アトリエ公演に関しては、  
どんなにつまらないと言われても  
「だって好きで来てるんでしょ？」って心持ちでしたので、  
好き勝手なことをやれました。  
たとえば演劇史的なことに関しても、  
歌舞伎の真似とか鈴木忠志さんの真似とか、  
不特定多数に見せると色々あるじゃないですか（笑）。  
だけどアトリエだと、  
そういうことを気にしないで好きにできた。  
秘匿性ってわけでもないですけど、

好き勝手できる場というのは、  
勉強するうえですごく大事だと思うので、  
それはよかったですね。

—— ホーム感がある一方で、  
客席と舞台が近いということでもあるし、  
三条会をずっと見てきている人もいるわけで、  
見方が厳しくなる面もあると思うんです。  
そういうことを俳優がどう感じていたのか  
……ということは俳優に聞いたほうがいいでしょうか。

**関** 僕の答えとしては、  
当時7、8人俳優がいたとして、  
7、8人が違う答えを持ってほしいなと思うんですよ。  
俳優が全員こう思ってたというんじゃなくて、  
それぞれに、  
アトリエと自分たちの演劇作品をつくるうえでの関係性の  
よかった点と悪かった点を  
持っていてくれたらよかったと思うんですが……。  
やっぱりみんな部室感が強かったですね。  
バイトのストレス発散みたいところからは  
抜け出せなかったかなというのが、  
正直なところですよ。

—— 演出家の関さんに話を戻すと、  
アトリエである程度、いろんなことを試して、  
それがアトリエ以外の公演の作品づくりに  
生かせたという実感はありますか。

**関** それはありますね。  
たとえば、アトリエで暇だったときに  
みんなで発声練習のゲームを  
考えようということになったんですね。  
煙草を1本立てて、  
大きい声を出して倒せたもの勝ち

みたいなゲームをしたことがあって、  
それをシェイクスピアの『冬物語』（2011年）とかで  
使ったんですよ。

王妃のハーマイオニが死んだときに、  
シチリア王のリオンディーズが  
「あー！」って大声を出して  
煙草を倒そうとするんですが、倒せないんですよ。

それがもの悲しいんですよ。  
当初のゲームの使い方とは違うんですけど。

—— なるほど。

**関** 自分は「王様」という権力を持っているにもかかわらず、  
この声で煙草一本すらも倒せない人間なんだ、  
ということ表現するために使う（笑）。  
そういう小ネタのレベルではたくさんありましたね。  
引き出しは増えました。

## アトリエを閉めた

—— そのアトリエを、  
2014年に閉めることになったわけですが、  
そこに至った経緯を伺えますか。

**関** まずは経済的な理由ですね。  
あと戦略的に、ここがもう使えないと思った。  
それは単純に人数が減ったからです。  
人数が減ることで経済的に回せなくなったんですが、  
それよりも大事なのは、  
たとえば10人いると、  
この10人で何をやるかを考えられたし、  
みんなが愛情を持ってアトリエに向き合ってた頃は、  
僕の中でもどんどん企画が浮かんできたんです。  
でも、人数が減っていき、  
アトリエへの愛情が、

みんな他の雑多なことで稀薄になってきたときに、  
僕の中で、企画が浮かんでこなくなるんです、  
愛情があるのが3人だけとかってときには。

—— そうですよ。え。  
アイデアの部分も含めて、  
やはり人数がいないとできないこともあるのでしょうか。

**関** 劇団員の中にはアトリエの継続を反対する人もいたし、  
だんだんそういうことになったんですが、  
それを多数決で決めるのか、  
あるいは「なんで反対なの？」とか説得するのか……

—— アトリエを閉めようかという話題自体は、  
いつ頃から出てたんですか。

**関** 始めて4、5年くらいの時期から出てましたね。  
でも、とりあえず閉める理由もなかったので  
続いてましたけど。

—— 話題としては気にはなりつつも4、5年やってきて、  
いよいよ閉めようということは、  
先ほどの経済的、戦略的な理由にもつながる  
劇団員数の減少がやはり……

**関** 決定的ですね。  
そこで新しく入れる気にもならなかった  
というのがありますけど。  
でも、やめちゃった人のことを考えると、  
もっと相談に乗ってもらいたかったですけどね。  
みんな、やめるときはあまりにも急だったので。

—— やめるときは、もうやめることが確定している。

**関** そういうものなのかもしれませんけどね。

最初に1人やめたときから、  
このサークルから始まった劇団がどう衰退していくのか、  
観察してみようという気持ちがあったので、  
その推移を見ている感じはおもしろかったですよ（笑）。  
もちろん嫌ではあるんですけどね。

—— 劇団員が減っていく中で、関さんご自身には、  
集団の変化自体を客観視できる視線があったと。  
集団として、あるいは劇団員としても、  
しんどい空気になったのかなと思うんですが。

**関** いえ、全然。  
個人と集団とを考えたときに、  
みんなが個人になっちゃってるだけなので、  
とにかくみんなが「お金欲しい」って言い出すんです。  
僕がお金をもらってるわけじゃないですよ。  
「関さんがそんなにもらってるなら、そこから割り振れ」  
って言われるならわかりますけど、僕ももらってない。  
そこで「みんなに配れる予算をもらえるように、  
みんなでなんとかしようか」ってことを  
考えられるならいいんですけど、  
そうじゃなくて、ただみんなで  
「欲しい、欲しい」と言ってるわけです。

—— ええ。

**関** 要は「団体」って概念がなくなっていくんですよね。  
みんなが個人。  
これを言うと誤解されるんですけど、  
たとえば、俳優が  
「僕がいいパフォーマンスをするために  
これだけのお金をください」って言うなら、  
僕は借金してでもそのお金をつくると思うんです。でも、  
「すいません、家族を食わせなきゃいけないんで  
お金をください」って言われても、



「なんであなたの家族のために借金して金を払わなければいけないの？」って僕は思うんですよ。だから、衰退していくというのは、そういった演劇作品に対する価値観の差が出てくることだと思うんです。

—— 三条会自体が、近い年齢の俳優でスタートして、みんな年をとり、いわゆる生活を背負っていく中で、演劇（活動）の位置づけが変わってきたということなんじゃないかな。

**関** そうですね。

—— リアル過ぎてわかりやすいですね（笑）。でも、それは断固止める理由にもならないでしょうね。

**関** それから千葉というものに対しても、僕がやることはやったかな、みたいな感じになったということはありません。

—— それは、千葉という看板を必ずしも必要としなくなったのか、あるいは千葉で関わるべきイベントや野外公演を一通りやったということなんじゃないかな。

**関** 一通りやって、これから新たにやることを探そうと思ったときに、千葉という場所のしがらみが発生するようなものしか思いつかなかったんで、しがらみがない範囲でやれることはやったかなということはありませんね。

## 無駄なことができるアトリエ

—— ひとつの区切りとして、

アトリエを閉めるという決断をして  
よかったことを伺いたいのですが。

**関** いやー、肩の荷が軽いですね。

—— それはアトリエ時代の後半に……

**関** 企画もないのに維持していかなければいけない状態が  
しばらく続きましたから。  
今は企画がなければ場所がなくていいよねって  
シンプルな話なので、急に気が楽になりました。

—— また三条会として、  
あるいは集団の創作の場として、今一度、  
アトリエを構えたいというお考えはありますか。

**関** ありますね。  
たとえば、旧アトリエを維持するときに、  
僕と他の人たちが合わなかった部分として、  
世の中には効率という考えがあって、  
「こういうふうはこの場所を使えば  
効率的ではないでしょうか」みたいな意見が  
主流を占めてきちゃう感じがあるんですけど、  
全然企画もなくて維持していた後期、  
肩の荷は重かったですけど  
楽しくてしょうがなかったんです。  
人にも貸さないで金魚だけが泳いでたり（笑）、  
なんて無駄なんだろうって。  
それが僕には楽しくてしょうがなかった。

—— なんか、贅沢ですね。

**関** そういった、効率を度外視できる場所は  
つくりたいと思います。  
そうしないと、僕も効率に流されちゃう可能性が高いので、

そういう場があるからこそ、  
「ああ、こんな無駄な場所を僕たちが持ってるなんて」  
ってことを、集団で話したいという思いはあります。

—— それは演出や作品をつくるうえでも「役に立つ」  
—— と言うと効率の話になっちゃいますけど、  
何らかの栄養になるとお考えですか。

**関** そうですね。  
それこそ、みんなが忙しくなると、  
稽古場に夜6時とか7時に集まって、  
10時くらいまで稽古して  
帰るような感じになっちゃうんですけど、  
昼間から飲んでて、そこで  
おもしろい話が出ることもあるわけじゃないですか。  
稽古やるって言って、  
1日稽古しないで終わることにも  
意義があるかもしれないし、  
忘年会やるって言ったのに、  
なぜかずっと稽古してるっていうのもいいかもしれない。  
そういったことが必要な気はします。  
でも、なかなか勝てないです、  
世の中の「現実」の説得力に。  
ほんとうにみんな忙しいですね。

—— それは、第1回のインタビューでお聞きした、  
演劇を通して矛盾に向き合いたい  
ということとも重なりますね。

**関** そうですね。  
ですから、無駄なことができる場所としての  
アトリエがあれば、  
まだまだ色々なことを考えられる気がしています。

(2014年12月20日@池袋)